

第 43 回(2018 年度)北海道建築賞

北海道大学
小篠 隆生君

作品名―「東川小学校・地域交流センター」

第 43 回(2018 年度)北海道建築奨励賞

株久米設計札幌支社
松谷 悟詞君

作品名―「訓子府町幼保連携型認定こども園 わくわく園」

審査経緯

本年度の北海道建築賞委員会は、昨年度と同様の委員構成を予定していたが、1名の委員が急遽参加できないことになり6名の体制で行われた。第1回の委員会は4月27日に開催し、ここでは表彰規程や審査日程を確認した上で、応募作品に対する全体的な審査方法について審議した。続いて、「北海道建築作品発表会作品集 2017」等の情報をもとに、今年度の審査対象になり得るような注目すべき作品について議論した。ここではいくつかの作品が候補として挙げたが、自薦での応募の可能性もあることから、今年度は委員会からの応募推薦はしないこととした。

応募締切を経て開催された第2回委員会（5月21日開催）では、作品審査に関わる学会倫理規定と具体的な審査方法を確認した上で、以下の計8作品を今年度の審査対象とした。今回の応募数は近年ではとりわけ少ない数であった。なお、応募作品の中に委員が関与するものがあるため、日本建築学会の定める『3.3.20 論文・作品の発表の場におけるピアレビューに関する倫理規定』に則り、その委員は当該作品の審査時には退席し、選考には一切関わらないものとした。

応募作品および設計者（応募順）

- ① 東川小学校・地域交流センター（小篠隆生君/北海道大学）
- ② 北海道大谷室蘭高等学校（大山政彦君/（株）日本設計）
- ③ 温根内ビジターセンター（川上雅彦君、宮越達也君/北電総合設計（株））
- ④ 北一ミート本社工場（柏田淳君/柏田淳建築設計事務所）
- ⑤ 「stair」さっぽろ西野二股整形外科（中井寿也君/一級建築士事務所アトリエ TARO）
- ⑥ 訓子府町幼保連携認定こども園 わくわく園（松谷悟詞君/（株）久米設計）
- ⑦ 未来のまちに贈る家（網野禎昭君/法政大学デザイン工学部、奥村賢史君、和知祐樹君/（株）平成建設一級建築士事務所、宮田雄二郎君/法政大学デザイン工学部）
- ⑧ House S（米田英美君/ヨネタエミ建築スタジオ）

これらの応募作品に対し、今年度の北海道建築賞においても継続して「先進性」「規範性」「洗練度」の3項目を基本的な評価軸とすることを確認した上で、第一次審査として応募書類による現地審査対象の選考を行った。各応募書類を詳しく通覧し、各委員が個別評価を述べた後に、各作品について活発な議論が為された。その結果、現地審査対象作品として、①「東川小学校・地域交流センター」、⑥「訓子府町幼保連携認定こども園 わくわく園」、⑦「未来のまちに贈る家」の3作品を選定した。

現地審査は7月5日に①、7月28日に⑥、7月29日に⑦の日程で行った。現地においては、それぞれの作品を実際の使われ方や技術的処理など様々な視点から確認するとともに、設計者や施主側との質疑を通じて詳細を把握することができた。

第3回の委員会（8月8日開催）では、現地審査を行った3作品を対象として、最終選考を行った。今回は委員が応募者でもある作品があることから、主査判断によって、当該委員はこれ以降委員会構成員

から外れ全ての作品の選考に関わらないものとし、残る5名の委員によって選考を行った。具体的な選考方法を再度確認した上で、まずは3作品それぞれについて各委員が評価とその論拠を述べた。この時点で高い評価を得られなかった⑦「未来のまちに贈る家」については、賞の対象から外すこととした。続いて残りの2作品については、個別に多くの観点から検討がなされ、賞の決定に至るまでの議論は長時間に及んだ。最終的に北海道建築賞に①「東川小学校・地域交流センター」、北海道建築奨励賞に⑥「訓子府町幼保連携認定こども園 わくわく園」とすることを、5名の委員全ての同意のもとで決定した。

「東川小学校・地域交流センター」は、人口8千人ほどの東川町において、町全体の将来的な都市計画を睨みながら、小学校と学童保育を含めた地域交流センターを町の中心と位置付け、それらを運動公園とも一体のものとして計画したものである。小さな町とはいえ、都市計画をダイレクトに建築化するかのようなある種のスケールの大きさは近年では他に例を見ないものであり、明快で骨太な説得力とともに北海道の小都市ならではの贅沢さに満ちた学校建築のあり方を示している。またこれらの計画の一环として旧校舎をコンバージョンすることなども含め、町に対する設計者の継続した地道な関わり方においても本作品は良き先進例となっていると思われる。行政側の積極的なビジョンと多くの人々の協力無くしては成立不可能なプロジェクトであったと思われるが、これらをひとつの方向性に向けて実現化したことは、本賞に値する総合的に優れた成果であると認め北海道建築賞とするものである。

「訓子府町幼保連携認定こども園 わくわく園」は、元々独立してあった幼稚園と保育園とを統合し、隣接する子育て支援センターや役場なども連携しながら町の中心を形成しようとするものである。約50m四方の方形プランにおける中庭型の空間構成それ自体はオーソドックスなものであるともいえるが、町産材のカラマツ集成材によるフレーム型構造形式と乳幼児のための細部に至る肌理細かさなどが齟齬なく同居している。特に回廊を含めた‘はだしの庭’廻りにおける幼児視線での様々な作り込みと気配りは、この建築を感覚的にも印象深いものにしている。審査においては遊戯室のスケールや外部との関わり方などについての指摘もあったが、構造・機能・ディテール・設備などがある水準を超えて全体が成立しており、設計者の熱意とともに完成度の高さを評価することができる。

現地審査を経て、残念ながら選外となった作品についても以下の通り審査での評価を簡潔に記す。

「未来のまちに贈る家」は、循環型資源の活用を目的としつつ、構造としてのみならず断熱性や調湿性など木材の能力を最大限に生かしながらその積極的な活用を図っていかうとする興味深い試みである。ここでは150mm角のトドマツ無垢材をビス留めによって集積することで屋根面および床面が構成されており、それらは構造であると同時に内部仕上げでもあり、断熱と調湿をも担っている。しかし経年による木材の歪みや割れに対する処方や、下部をRCとしたこと、温熱環境的な設備計画などに疑問が残った。また、この構法ならではの新たな空間のあり方には、まだ開拓の余地があるように思われた。

(山田深)

第43回(2018年度)北海道建築賞

北海道大学 小篠 隆生君

作品名「東川小学校・地域交流センター」

東川町は、広大な農業風景が広がっている。開拓時から原野区画の基準となった基線が開拓道路となり、街路にもなった。農地区画は畦道により水田割された。新しい小学校敷地が、市街地と広大な農地の接点にあることから、教室・ワークスペース2学年分のユニット幅と水田割を同じ幅にしている。これを小学校のモジュールにすることで、開拓基線、水田割という地域の寸法が、建築に内在することになる。この場所に呼応する建築は、環境、まちづくりに展開する建築形式として評価できる。また、この地域の緩やかな土地の傾斜を受けた、小学校、地域交流センター、特定地区公園のランドデザインをしている。校舎前の農業水路でも、流れに沿って登校する子供たちや道行く人の日常風景に水路のあるまちづくりデザインが感じられる。

校舎は平屋で、大地に置かれた伸びやかでリニアな建築である。平屋の小学校は、階によって学年を分断することも無く、長い廊下は見通しが効き、子供たちの動きに先生の目が届く。また、学年単位空間を雁行させることで、見え隠れするワークスペースと教室の関係がつけられている。ワークスペースはフレキシブルに考えられており、家具は利用する先生や児童の使い勝手に配慮した良質のデザインがされている。この上部は大きな気積のハイサイドライトで、学年単位の領域を開放的にしている。ハイサイドライトは北側に開き、陽射しによる室内の熱化を避け安定した熱環境となっている。窓からは、地域の景観要素であるキトウシ山や大雪山が遠くに見え、学校のモジュールにした水田割の田園風景が広がる。

設計者は、この小学校の基本計画を東川町のまちづくり計画に位置づけてきた。市街地とリンクした回遊性構想を持ち、旧東川小学校を文化芸術交流センターとした企画構想とリニューアル設計に尽力してきた。今回の東川小学校・地域交流センターは、コミュニティアーキテクトならではの作品である。それは、まちづくりとランドスケープデザインを内在した建築であり、地域・場所から生まれる建築として普遍的な形式を導いている。

よって、ここに北海道建築賞を贈るものである。

(文責：佐藤 孝)

■訓子府町幼保連携型認定こども園 わくわく園

役場や公民館が集まる訓子府町の中心地域に建てられた町立認定こども園である。既存の幼稚園と保育園に挟まれたグラウンドを敷地とし、新園舎完成後に旧施設を解体、そこを園庭・駐車場として整備する計画であったことから、新設の平屋園舎の配置や、正方形に近い平面形状は、ほぼ必然的に導かれたものと思われる。このプロジェクトではそれを逆手に取り、管理上の都合で長い直線になりがちな幼稚園の平面計画をループ状にまとめ、行き止まりの無い回廊型園舎を実現している。ループの中心に設けられた裸足で遊べる中庭は、建物外周のダイナミックな園庭とは対照的に、こども目線のコンパクトなスケールで構成された特別な場所となっており、トリミングされたオホーツクブルーの空が、建物内の殆ど場から望めるよう設えられている。この中庭に面した回廊をはじめ、インテリア全体がこどもに寄り添った細やかな気遣いや工夫によってデザインされており、それが2000㎡近い床面積を持つ施設に、住宅のような密度と安心感を与えている。

構造的には、外周の諸室群を1.8mごとのリズムカルな門型フレームで構成し、それらを回廊部分の格子梁が繋ぐ、空間の役割と構造としての意味合いを重ねた明快な計画となっており、構造材のサイズや見え掛かりの面積は、構造的合理性はもちろん、意匠的效果や、補助金獲得の為の条件をもクリアできる思慮深い選択がなされている。内部空間全体の視覚的繋がりを強めている構造部材および木製品の大半は、地場技術の活用、地域経済の発展に寄与すべく、現場から半径25Km圏内にある町有林や工場で伐採・製材・加工されたものであることも言添えておきたい。

保護者や保育士など多くの町民が参加するワークショップ形式で進められたこのプロジェクトは、将来を担う子供たちへの期待や愛情など、地域住民の様々な思いが形になったものと言えるだろう。開園以来、同町への移住やUターンが増え、現在は想定以上の園児数となっていることから施設の充実度がうかがえる。内容の異なる多くの思いを受け止め、公共建築をこうした密度ある空間へ結晶させるには、設計者が抱く単なる計画論だけではない高い総合力と建築に対する熱い思いが必要だったに違いない。現地審査の最後に、実は設計者がこの町の出身であり、幼少時にこの園に通っていたと聞き、なるほど合点がいった。

文責：赤坂真一郎